

に値する資料がなかったため、尼寺には必ずしも関係のない仏教美術に焦点を置いた美術史的研究法による資料から推論を引き出すしかなかった。そこで調査訪問の主要な目的の1つには、比丘尼御所に関する日本語での研究資料を出来る限り集めること、そして縁切り寺と東慶寺についてより詳しい情報を集めることであった。調査訪問のもう1つの目的は、近世日本の仏教における女性について研究している教授と面会する機会を持ち、助言を求めることであった。

3. 調査訪問の成果

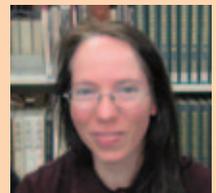
資料を集めることが調査訪問の主要な目的であったが、研究分野の教授と面会できたことが、結果的にはより大きな収穫となった。調査訪問の最初の週末、非常に幸運なことに、私は東慶寺で高木^{ただし}侃教授とお会いし、話を伺う機会を得た。高木教授は江戸時代の「離縁状」に関してこれまでに多くの論文を執筆されている。また法制史と併せて、幕府公認の2つの縁切り寺である鎌倉の東慶寺と群馬の満徳寺についても研究されている。高木教授からは、研究資料に関する助言を頂き、さらには

出版されているご自身の研究資料を頂いた。英語の研究資料だけで東慶寺について十分な研究を行ったつもりでいたならば、私は大きな間違いを犯すところだった。私はこの面会の機会が得られたこと、そして新たな資料を入手できたことを嬉しく思う。

次に、比丘尼御所制度の研究に関して、私は京都と神戸に小旅行をし、近世の比丘尼御所研究の分野で第一人者である方たちに会いに行った。京都では、尼寺大聖寺の支院である大歓喜寺の中にある中世日本研究所で、2人の研究者にお会いした。神戸では、ある大学教授にお会いした。教授は2つの比丘尼御所について掘り下げた研究を行い、比丘尼御所制度全般について、また2つの比丘尼御所のうちの1つの人的構造について、全般的背景知識を提供されている。

全体として、この学術交流は私にとって非常に素晴らしい機会となった。この交流は私の研究の方向性に大きな影響を与えるものであった。私はこれからも駆け込み寺と比丘尼御所の基礎構造について分析・詳述するというテーマを追究し続け、近世日本の仏教および女性に関する研究に貢献していきたい。

念願の日本コロムビア訪問



Caroline Boissier
(パリ第7大学)

こんにちは。フランスから来ましたカロリーヌ・ボアシエと申します。パリ第7大学の6年生です。私は日本の音楽産業について研究しています。博士論文は、日本コロムビアというレコード会社についてですが、フランスの図書館ではなかなかそれに関する書籍等を見つけることができません。今回、研究者として、非文字資料研究センターを訪問する機会に恵まれましたので、論文を書き上げる道筋が見えてきました。

日本コロムビアという会社は、日本では一番古いレコードレーベルになります。論文を書き上げるにあたって、私は、日本コロムビア社の歴史と、レコードのテクノロジー発展が重要なポイントだと思っていますが、テクノロジーに関する研究は難しいのではないかと思います。そこで、滞在の最後の研究発表に向けて、特にテクノロジーの発展について調査したいと思いました。

まず、神奈川大学に来る前に、私はフランスから、日

本コロムビア社に手紙を送りました。社史なども含む質問も書かせていただきましたが、うまく伝えられなかったかも知れません。

そこで、私は非文字資料研究センターに到着して、先生やチューターとお会いした際に、そのことも含め、私の研究について相談しました。先生方からは、いくつかアドバイスもいただき、日本コロムビア社に関する質問については、訪問前に少し修正していきましょうとご提案くださいました。

そして、ついに、日本コロムビア社を訪問する日がやってきました。日本コロムビア社の方々は、一生懸命私の質問に答えようとしてくださいました。私の質問が複雑だったため、多くの書籍の中から答えを探そうとしてくださいました。また、そこでは、最古の機械から最近の機械まで、様々な機械を見せてくださいました。スタジオで、レコードの録音風景も見学させていただいたので



すが、これは本当に面白かったです。

その後、滞在の終わりには研究発表を行う予定でしたので、その日に向けて、日本語でレポートの準備をしました。日本語の使い方について、チューターが色々アドバイスをしてくださいました。チューターの専門は、イギリス文学史でしたので、日本の音楽産業について私に説明するのは、とても難しかったかも知れません。ですが、なんとか二人で協力しながら、発表に向けて準備をしました。研究発表は無事終わり、先生方からは、研究の良かった点や、アドバイス等をいただきました。

私は滞在期間中、日本コロムビア社の方々をはじめ、たくさんの人に会いました。非文字資料研究センターでも、同時期に来ていた韓国と中国からの訪問研究員の方々にもお会いしました。その方々の研究内容も興味深く、お話をするのは楽しかったです。滞在した寮の管理人の方や、その他、たくさんの方々にお世話になりました。最後に、この機会を与えてくださった非文字資料研究センターの皆様、先生方、チューター、お会いした皆様方に、感謝の気持ちを表したいと思います。

秀吉のお城を巡って



鄭潔西
(浙江工商大学東亜文化研究院)

私は2013年1月7日から3週間、招聘研究員として神奈川大学非文字資料研究センターを訪問し、様々な資料収集と実地調査を行った。私の研究テーマは「『朝鮮日本図説』にみる豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争」である。

周知のように、秀吉の朝鮮侵略戦争(1592～1593)のような歴史事件に対しては、これまでの研究のほとんどは文献資料を中心に進められてきた。ところが、戦争に関する資料は、必ずしも文字により記録された文献資料とは限らない。図像などの非文字資料が文献資料と比べ量的には極めて希少でありながら、歴史を写實的に描いてより直感的に、より分かりやすく歴史を物語ってくれるのは、なかなか興味深いことだと思われる。

秀吉の朝鮮侵略戦争に関する図像資料は、日本と韓国には多数残されている。よく知られているのは、「釜山鎮・東萊府殉節図」(朝鮮国製作、韓国陸軍博物館所蔵)、「朝鮮軍陣図屏風」(日本国製作、鍋島報效会所蔵)、「朝鮮蔚山合戦之図」(日本国製作、前田育徳会尊経閣文庫所蔵)、「平壤城攻防図屏風」(朝鮮国製作、韓国国立中央博物館所蔵)、「壬辰倭乱図屏風」(朝鮮国製作、和歌山県立博物館所蔵)などの屏風図である。当時の中国人が製作した図像資料で、これまで紹介されたのは、「征倭紀功図巻」(個人所有、所蔵不明、写真有り)の一種しかないのである。

私の今回の研究対象は『朝鮮日本図説』という最近中国の国家図書館で発見した新資料である。当該図説には、1597～1598年の戦役期に朝鮮南部にある日本侵略軍

の倭寨図(倭城図)が19箇所が描かれている。この図説は、上掲の屏風図と「征倭紀功図巻」のような絵巻と異なり、木版印刷による印刷書である。このような印刷書は、短時間に大量印刷が可能であるが、絵巻に比べその画像の画質は大幅に低減した。ところが、この図説は著者が戦争直後に自ら朝鮮南部の各倭城に入城し詳細に検視したことが明記され、実測によって作られた可能性が高く、その写実性は無視できない。また、『朝鮮日本図説』の刊行趣旨は明朝の海上の安全を確保するという点にあることから、終戦直後の当時、明朝に対して日本からの脅威はまだ続いていたことが分かる。この図説は朝鮮南部の倭城の全体性が強調され、対日本の軍事書として認識すべきだと思われる。

訪問期間中、私は神奈川大学校内の図書館や各図書室はもちろん、国立国会図書館、国立公文書館、東洋文庫、蓬左文庫などの図書館の資料を存分に利用でき、また、ほぼ同じ時期に建築された小田原城、名古屋城を巡って、実地調査を行った。そして、訪問研究期間が終わった後も日本に残り、秀吉の朝鮮侵略の前線基地として築かれた九州の名護

